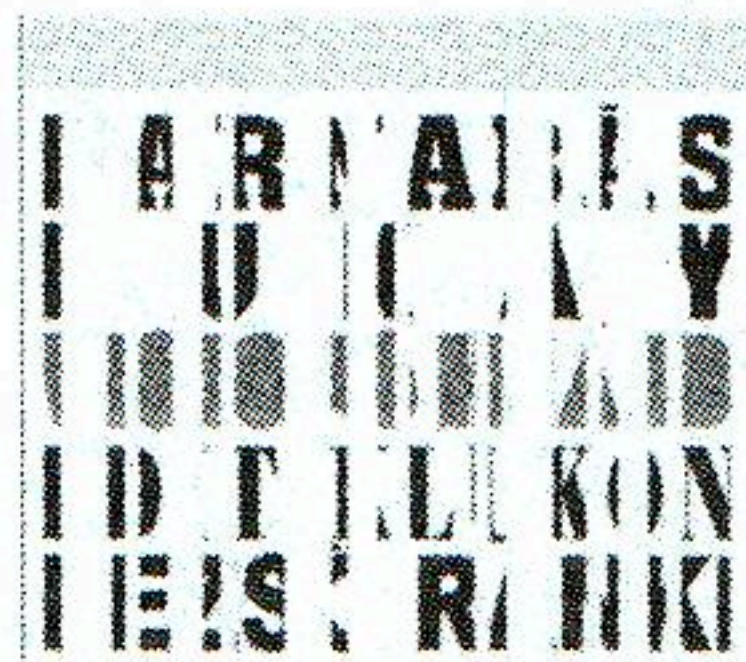


■長木誠司 (音楽学)

夫人クルコンとのコンビでサティ／ケージの《ソクラテス》やリストの作品を録音し、3年前のラ・フォル・ジュルネでも来日していたラーンキだが、今度はハンガリーの打楽器奏者としても有名なドウカイの、作曲家としての面に光を当てた。2台ピアノによるミニマル・ベースの作品が5曲だが、タイトルに「カノン」という表示があるものが2曲ある。たしかにミニマルの反復は「カノン」なのかも知れない。ゆつたりとした時間感覚で流れる曲の合間に、間奏としての無音の「Break」が挿入されていて、1枚トータルでアンビエント的というか、安らかな癒し系の音楽体験ができるようになってきている。まあ、一風変わったCDではある。アルバム全体のタイトルにもなっている《聞こえるヴィジョン》という作品が、唯一テンポのやや速い、音の絡みの多いもので、そのほかはややフェルドマン風、ポツンポツンという音の連なりが顕著である。ご用とお急ぎから逃げ出した方にお勧め。

Dukai, Barnabás



「聞こえるヴィジョン」～ドウカイ：2台のピアノのための作品集

デジュ・ラーンキ, エディット・クルコン (p)
〈録音：2009年2月〉
[Budapest Music Centre
©BMCCD147]

■矢澤孝樹 (音楽評論)

ルセの新盤はドイツの音楽家フローベルガー。ルセは20年近く前にフローベルガーを録音しているが、新録音に曲目の重複はない。すべて組曲で占められているあたり、作曲家のフランス的側面を強調する狙いか。シテ・ドラ・ミュージック所蔵ヨハネス・クーシエ1652年作（1701年ラヴァルマン）の名器を用いているが、フローベルガーの友人ハイヘンスはクーシエの楽器を所有していたというし、このあたり楽器と作曲家に関する楽しい想像の翼を広げてくれる。上質な響きのクッションと明度の高い音符たちに包まれていると、有名な追悼曲を始め哀歌的曲調のアルマンドやサラバンドが多いにもかかわらず、たとえばレオンハルトの、蠟燭の光の下で髑髏を眺めメント・モリと眩くようなフローベルガー像とは別世界。もちろんそれはルセ自身の、大胆かつ繊細なアゴーキ操作と装飾に彩られた演奏によるところが大きい。この音楽家の国際性が、フランス側から証明される一枚。

Froberger



フローベルガー／チェンバロ組曲集
〔組曲第2番二短調, 第7番ホ短調, 第8番イ長調, 第9番ト短調, 第10番イ短調, 第12番ハ長調(《フェルディナンド三世の悲しい誌に寄せる追悼曲》含む)〕

クリストフ・ルセ (cemb)
〈録音：2007年2月〉
[ambroisie@AM148]

■小石かつら (音楽学)

ルイーダ・ガッティ(1740～1817)はモーツァルトより16歳年長で77歳という長生きをした作曲家だ。北イタリアのガルダ湖畔の街でオルガニストの家に生まれ、前半生を当地で過ごした。この頃、初めてイタリアを訪れたモーツァルト父子に出会っている。後半生はモーツァルトの後継者としてザルツブルクの宮廷楽長に就任し活躍する。モーツァルトの死後、ちょうど楽譜の流通が大きな意味を持つ時代が始まるのだが、ガッティは1795年にいち早く楽譜の大量出版を始めたブライトコプフ社にかけあい、モーツァルトの作品の出版に尽力した。その一方で、自身の作品はほとんど出版することがなかったものの多くのオペラ、宗教曲、室内楽作中を残している。本ディスクに収められた室内楽はのびやかでキラキラと明るい。知られざる名曲を次々と録音するカラムス・アンサンブルの演奏によるところも大きい。管楽器と弦楽器の絶妙の組み合わせは聴く者を晴々とさせる力を持つ。

Gatti, Luigi



ルイーダ・ガッティ：オーボエ、ファゴット、2本のホルンと弦楽五重奏のためのセレナータ二長調、イングリッシュ・ホルン、ファゴット、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロとコントラバスのための六重奏曲変ホ長調

カラムス・アンサンブル
〈録音：2008年11月〉
[MDG@6031589-2]

■柿市如 (音楽学)

デシヤルムはパリ・オペラ座管弦楽団での演奏と並行して、現代音楽に重点を置いたソロ、アンサンブル活動を行う気鋭のチェリスト。今回は地味ながらも個性的な作曲を続けるフーバーのチェロ作品を全曲録音した。6曲中4曲が世界初録音。チェンバロ、プク(韓国の太鼓)、声(息と話し声)などチェロとの取り合わせもユニーク。印象的な1曲目《非時間性の息》は、フルート・ソロ(またはフルートと他楽器のために書かれた後、様々な楽器用にアレンジされた。ここでは多重録音による4声のカノン・ヴァージョン。パーセルの《デイドとエネアス》の《デイドの嘆き》にちなみ、副題は「音楽的思考を失った嘆き」、有名な半音下行旋律が変形されていく。各声上の同じ音型が間を置いて思い出したように響く。派手を盛り上がりはなく、徐々に弱まるトレモロの霧の中にすべてが消えゆく。サーリアホのアルバムでも聴かせた、デシヤルムのきめのこまかい音色使いが素晴らしい。

Huber, Klaus



クラウス・フーバー／チェロ作品全集
〔非時間性の息, 無限の移高, ラザロ, 硬い筆先, …穏やかな安らぎ…(ジョン・ケージへの追悼), パルティータ〕

アレクシ・デシヤルム (vc)
セバスチャン・ヴィシヤール (p, cemb) ジャン＝パティスト・ルクレール (プク=韓国太鼓)
〈録音：2009年8月〉
[Aeon@AECD1089]